様式第１号（第１０条関係）

2024 年度業務実績報告書

提出日　2025 年　1 月　17 日

１．職名・氏名　教授・水田　尚志

２．学位　　学位　博士（農学）、専門分野　水産学、授与機関　京都大学、授与年　平成 5 年

３．教育活動

⑴講義・演習・実験・実習

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　化学Ⅱ（2 単位　毎年開講）　2 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：15 コマ

②内容・ねらい
　生物体は多種多様な化学物質から成り立っているため、海洋生物資源学の分野における数々の事象を説明するためには化学的知識が必須となる。本講義では化学反応に関わる基礎を習得した後、各種分析法の原理について学ぶ。さらに生化学の理解に必要不可欠な各種有機化合物の構造や特性などについて理解を深める。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
　今年度は、e-ラーニングシステム（Google Classroom）を用いて講義資料の配信を行いつつ、全 15 回のうち 14 回は対面授業で、1 回はオンデマンド授業（Google Classroom に掲載した動画視聴および課題提出）で行った。掲載した動画に関しては、Google Classroom に継続的に掲載することで事後に講義内容を確認できるようにした。
　本学科では、学生間の「化学」の学力差が大きい。化学の素養がほとんどない学生に配慮して次のような工夫を行っている。
（１）基礎化学的内容の重視
　基礎化学的内容および基礎分析化学的な内容を前半に行い、後半は主に基礎的な有機化学の内容をとり入れている。特に基礎化学的な部分の説明をきめ細かく行うことによって、化学の学力が低い学生ができるだけスムーズに分析化学的、あるいは有機化学的な内容へと入っていけるように配慮している。
（２）到達度の確認
　各章末に「到達度の確認」という 1 問 1 答形式の問題あるいは計算練習を内容とするパワーポイントファイルを作成し使用している。これは、講義中に説明した内容のみならず、講義では説明しなかった発展的、補足的内容も織り交ぜることによって、反復による確認と発展的内容の修得をさせようとするものである。この「到達度の確認」を取り入れることによって学生とのコミュニケーションが増加し、意欲的に学習に取り組む学生が大幅に増えたものと実感している。
（３）「化学実験」との連携
　後期に開講される「化学実験」と関連が深い 2 つの章（「物質量と濃度」および「分析の基礎」）を「第 1 部」として講義の冒頭に配置することによって、化学実験の理解をより深められるよう配慮している。特に、「中和滴定」や「食品中の酸の定量」など計算を必要とする実験項目において、受講生の抵抗感が著しく軽減されたものと考える。また、「化学実験」の項でも述べるとおり、「化学実験」の予習（予備計算）を本講義のレポート（または練習問題）として課すことで、化学を苦手とする学生でも抵抗なく実験に取り掛かれるようになった。続く「第 2 部」では、数値計算やデータ処理など化学実験でのレポート作成に関連が深い 2 つの章（「単位」および「数値の取り扱い」）を配置し、レポートの作成を円滑に進めることができるように配慮した。このように「化学Ⅱ」の講義に、「化学実験」の理解をサポートする機能を意識的に持たせることによって両科目の理解度を一層上げることにつながっている。
　授業形態としては、授業内容をまとめたレジメ（空欄補充形式）を中心に進めたが、適宜プ

リントを用いて図解することにより、分析法の原理等を理解しやすいように配慮している。また、講義の予習・復習のためのコンテンツ（過去の期末試験問題を含む）や講義の補足的内容など授業の理解に役立つ情報を e-ラーニングシステム（Google Classroom）に掲載している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　海と暮らし（2 単位　毎年開講）　1 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：1 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　「海と暮らし」において「福井の魚」と題する講義 1 回（11 月 1 日開催）を担当したが、この中では、越前ガニをはじめ、福井県にて漁獲される魚介類を紹介するとともに、いくつかの魚種についてタンパク質（主にコラーゲン）資源としての利用の実態や可能性について解説した。今年度の海と暮らしでは全面的に Zoom での遠隔授業となったが、担当授業（11 月 1 日）の開始後約 30 分経過した時点で学内ネットワークの遮断が起きたため、以降の授業を行うことができなかった。よって、後日（12/16 から 12/23 の期間）オンデマンド形式の補講を行った。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
　今年度は永平寺キャンパスにて遠隔授業と対面授業を兼ねたハイブリッド授業として開講することで、小浜キャンパスの学生や学外生も受講可能とした。さらに授業の録画も行い、高大連携事業の一環として、県内の高等学校へ授業動画を公開した。Zoom を用いて講義を進めたが、図や写真を多用することによって福井で漁獲される魚の特性をイメージしやすいように配慮している。また、本講義では水産加工残滓や外来生物など社会的にも関心の深いテーマに結び付けるとともに、日々の食生活における実体験や雑学的な要素を取り入れることによって抵抗感なく理解ができるよう工夫している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　食品化学（2 単位　毎年開講）　2 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：15 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　　食品のもつ機能（栄養性、嗜好性、安全性、生体調節など）を学ぶためには、食品を構成する個々の成分がどのような特性を持つかを知ることが必要である。本講義では、魚介類の可食部（主として筋肉）を構成する主要成分（タンパク質、脂質、エキス成分など）がどこに分布し、どのような化学的特徴をもつのかを理解することを目的としている。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
　　本講義では、基本的に対面授業で行ったが、対面授業ができない場合については Google Classroom に動画を掲載するオンデマンド授業とした。動画は Google Classroom に継続的に掲載することで事後に講義内容を確認できるようにした。主に授業内容をまとめたレジメ（空欄補充形式）を中心にすすめたが、プリントを用いて図解することにより、魚介類の組織構造や構成成分の特性を理解しやすいように配慮した。Google Classroom 上には講義の予習・復習のためのコンテンツ、講義の補足的内容など関連資料を掲載しているが、毎年受講生によるこれらの積極的な活用が見受けられる。中間試験を 1～2 回程度実施し、到達度の自己確認を行わせている。
　また、後期に「一般成分分析」を主な内容とする「食品化学実験」が開講されるが、本講義における「第 3 章　一般成分」をできるだけ「食品化学実験」の開講前に行うことで、同実験の理解が深まるように配慮している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　化学実験（1 単位　毎年開講）　2 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：8 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　海洋生物資源学科の専門領域では海洋生物資源の生産・利用・流通など多様な領域を扱うが、実験手法として化学分析法を用いる場合が多い。本実験では、実験室で安全に実験を行うための知識を修得するとともに、海洋生物資源学の分野で重要となる基礎的な化学分析の操作法と原理を理解することを目的とする。担当する主な部分は、第１部（「ホールピペットによる水の測容と精度・確度検定」、「硫酸銅(II)水和物中の結晶水の定量」および「試薬溶液の調製と濃度検定」である。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
⑴１班あたりの人数を 4～5 人として、班単位で実験の操作および実験データの解析を行うように指導している。その中で班員間のコミュニケーションを深めさせ、特定の班員に偏らずすべての班員が満遍なく実験を行えるように配慮している。授業の冒頭では「JABEE 学習教育到達目標 C-5（他者との協調)」についてスライドを用いて解説し、本実験と目標 C-5 との関連性を理解させるよう努力している。また、実験開始前には必ず班単位で打ち合わせを行わせ、その記録を「化学実験打ち合わせ記録」として提出させることで、班内でのコミュニケーションを促すとともに、チームワークの重要性を認識させている。
⑵e-ラーニングシステム（Google Classroom） の活用により、学生が講義資料のダウンロードをいつでも行えるよう配慮している。
⑶本実験の受講者は「化学Ⅱ」の受講者とほぼ一致しているため、従前からこれらの科目の連携を図ることによって両科目の理解度をさらに深めるよう努めている。具体的には、「化学実験」の予習段階で必要な準備計算を「化学Ⅱ」での練習問題として課した。その結果、計算を苦手とする受講生も抵抗無く実験に取り掛かれるようになった。さらに、「化学実験」にて行った実体験が「化学Ⅱ」にて学んだ理論の理解にも大いに役立ったと考える。また、「化学Ⅱ」における章の配置に工夫を加えたこと（「化学実験」に関連の深い章を冒頭に配置したこと）も「化学実験」の理解をさらに深めたと考える。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　基礎演習（1 単位　毎年開講）　3 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：15 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　本演習科目は、研究室分属をした 3 年生について研究分野に関連する文献を講読させ、討論することによって当該研究分野に関する理解を深めさせようとするものである。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
⑴基本的には各受講生（3 年次生）自身に文献の調査・選択をさせるが、研究室配属の上級生（4 年生および大学院生）に文献の調査・選択のみならず、和訳の添削を行わせるなど受講生のサポートをさせることにより、研究室分属学生間のコミュニケーションを深めさせるように配慮している。
⑵文献の紹介を行った際には、教員や他の学生からの質問に十分に答えられないことが多いが、答えられなかった質問について発表後に調査を行い、Google Classroom に回答を投稿させることで、より深く文献の内容を理解させるように促している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
　専攻演習（2 単位　毎年開講）　4 年生　（2024 年度）
　担当コマ数：30 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　本演習科目は、4 年生に当該研究分野に関連する文献を講読させ、討論することによって個々の文献の背景や内容の理解を深めさせようとするものである。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
⑴基本的には各受講生（４年次生）自身に文献の調査・選択をさせるが、研究室配属の上級生（大学院生）に文献の調査・選択のみならず、和訳の添削を行わせるなど受講生のサポートをさせることにより、研究室分属学生間のコミュニケーションを深めさせるように配慮している。
⑵文献の紹介を行った際には、教員や他の学生からの質問に十分に答えられないことがしばしばあるが、答えられなかった質問について発表後に調査を行い、Google Classroom に回答を投稿させることで、より深く文献の内容を理解させるように促している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
卒業論文（4 単位　毎年開講）　4 年生　（2024 年度）

②内容・ねらい（自由記述）
本科目では、当該研究分野における研究に取り組み、論文を完成させることを目的とする。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
研究室で行うことになる基本的な実験操作を 3 年次の仮分属時から学ばせることにより、上級生とのコミュニケーションを深めさせ、さらに 4 年次の卒業論文研究にスムーズに移行できるように配慮している。また、研究の進行状況について要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ発表させる中間報告を数回程度実施している。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
食品機能化学（2 単位　毎年開講）　博士前期課程 1･2 年次　（2024 年度）
担当コマ数：8 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
近年、嗜好性（味や食感など）に関わる二次機能性成分および生体機能の維持や増進に機能する三次機能性成分が注目されている。本講義では、それらの食品機能や関連する成分の化学的・生理機能的特性について、最近の研究動向を交えて講述・討論する。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
講義の前半部分では食品機能ならびにタンパク質に関する概説を行うとともに、後半において筋肉タンパク質、結合組織タンパク質、植物タンパク質、乳および卵タンパク質の機能に関する最新の研究内容を解説した。これらと並行して、食品の二次機能（主にテクスチャー）に関連する英語文献を配布して、これを教員と受講者で輪読し、重要な点については他の参考文献も参照しながら解説した。講義内容および教材として用いた英語文献に関するレポート試験を行い、この結果と輪読時の発表状況などをあわせて評価を行った。
今年度は社会人学生のオンデマンド受講に対応した。具体的には対面授業の Zoom 録画を授業の 1～2 日後に Google Classroom コースに掲載して視聴させるとともに、同時に掲載する課題への回答をもって出席とした。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
海洋生物資源利用学専攻演習Ⅰ（2 単位　毎年開講）　博士前期課程 1 年次
（2024 年度）　担当コマ数：30 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
海洋生物のもつ有用成分の抽出、機能、利用方法等に関連する諸問題を解決するための基礎を修得させる。さらに、国内外の最新の情報を迅速に取り入れる能力および必要な情報を整理して発表し、討論する能力を養成する。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
各自の研究テーマに関連する学術論文を検索・熟読させるとともに、プレゼンテーション能力や自主性の向上を目的として、当該論文の要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ、講義時にそれらを資料として発表させる。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
海洋生物資源利用学専攻演習Ⅱ（2 単位　毎年開講）　博士前期課程 2 年次
（2024 年度）　　担当コマ数：30 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　海洋生物のもつ有用成分の抽出、機能、利用方法等に関連する諸問題を解決するための基礎を修得させる。さらに、国内外の最新の情報を迅速に取り入れる能力および必要な情報を整理して発表し、討論する能力を養成する。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
　各自の研究テーマに関連する学術論文を検索・熟読させるとともに、プレゼンテーション能力や自主性の向上を目的として、当該論文の要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ、講義時にそれらを資料として発表させる。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
海洋生物資源利用学専攻実験Ⅰ（4 単位　毎年開講）　博士前期課程 1 年次
（2024 年度）

②内容・ねらい
　海洋生物資源の栄養機能、嗜好性機能、生体調節機能などに関連して、その社会的背景や意義・必要性をふまえて研究課題を設定して研究に取り組み、課題を解決する能力を身につける。また、修士論文中間発表会での発表や論文の取りまとめを通じて、プレゼンテーション能力を高める。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
　研究の進行状況について年に数回程度要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ発表させている他、学会において各自の研究内容を積極的に発表させ、外部からのコメントや批判を取り入れながら研究を進める。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
海洋生物資源利用学専攻実験Ⅱ（4 単位　毎年開講）　博士前期課程２年次
（2024 年度）

②内容・ねらい
　海洋生物資源の栄養機能、嗜好性機能、生体調節機能などに関連して、その社会的背景や意義・必要性をふまえて研究課題を設定して研究に取り組み、課題を解決する能力を身につける。また、修士論文発表会での発表や論文の取りまとめを通じて、プレゼンテーション能力を高める。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫
　研究の進行状況について年に数回程度要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ発表させている他、学会において各自の研究内容を積極的に発表させ、外部からのコメントや批判を取り入れながら研究を進める。

①担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
海洋生物資源利用学特別演習（4 単位　毎年開講）　博士後期課程１～２年次
（2024 年度）　　担当コマ数：30 コマ

②内容・ねらい（自由記述）
　博士前期課程における専攻演習に引き続き、博士後期課程の学習の中心である博士論文の作成に向けて、海洋生物資源の生体構成成分の構造と機能およびその利用に関する研究発表や研究論文の批判的検討を通じて、基礎理論、方法論および研究成果に対する理解の深化を図る。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
　各自の研究テーマに関連する学術論文を検索・熟読させるとともに、プレゼンテーション能力や自主性の向上を目的として、当該論文の要旨およびプレゼンテーションファイルを作成させ、講義時にそれらを資料として発表させる。

(2)その他の教育活動
①非常勤講師窓口教員 ・化学Ⅰ（2021 年度～） ②ゲストスピーカーの選定（細井准教授と協働） ・大学院専門特別講義Ⅰ「化粧品開発の基礎と応用」（南保技術研究所所長　南保幸男氏）、2025 年 11 月 28 日オンライン開催

４．研究業績

(1)研究業績の公表

①著書

【　本】

②学術論文（査読あり）

【　本】

③その他論文（査読なし）

【　本】

④学会発表等

1）自己消化により可溶化されたミズクラゲ主要コラーゲンの性状（英題：Characterization of Moon Jellyfish Major Collagen Solubilized by Autodigestion）、田邉瞭太・水田尚志・細井公富・横山芳博（福井県大海洋生資）、令和６年度日本食品科学工学会大会（2024 年 8 月、名城大学、台風のため見なし開催）

2）キダイ鱗からのコラーゲンおよび無機成分の効率的回収方法の検討、田邉瞭太・吉田孝彰・細井公富・横山芳博・水田尚志（福井県大海洋生資）、令和６年度日本水産学会中部支部大会（2024 年 12 月、三重大学）

3）サケ鼻軟骨のコラーゲン分子種に関する生化学的研究、三谷海斗・今道力敬・細井公富・横山芳博・水田尚志（福井県大海洋生資）、令和６年度日本水産学会中部支部大会（2024年12月、三重大学）

4）リピドミクスによりマサバへしこから検出された脂肪酸ヒドロキシ化脂肪酸、吉田孝彰・今道力敬・下畑隆明・水田尚志・横山芳博・細井公富（福井県大海洋生資）、令和６年度日本水産学会中部支部大会（2024 年 12 月、三重大学）

5）魚粉代替原料としてのアメリカミズアブの有用性に関する研究、山越佑馬・柴崎英圭・水田尚志・横山芳博・細井公富・佐藤秀一（福井県大海洋生資）、令和６年度日本水産学会中部支部大会（2024 年 12 月、三重大学）

【5 件】

⑤その他の公表実績

1）地域連携研究推進支援研究成果のプレスリリース

『海洋生物資源学部水田教授らが、「小鯛のささ漬け」の原料となる小型のキダイ（レンコ鯛）の鱗からコラーゲン等の効率的な回収方法を開発しました』、（2024年12月25日）

【1 本】

(2)科研費等の競争的資金獲得実績

①共同研究（株式会社リナイス、課題 1）　600 千円　研究代表者（2024 年度）

「サケ鼻軟骨 XI 型コラーゲンの分子多型性に関する研究　－ 各分子型の単離法の確立とサブユニット組成の解明　－ 」

②共同研究（株式会社リナイス、課題２）　400 千円　研究代表者（2024 年度）

「サケ鼻軟骨におけるⅡ型／XI 型コラーゲン量比の簡易分析法の確立」

③地域連携研究推進支援　1,185 千円（2024 年度）

「水産廃棄物を有用資源化し地域ブランド品の創出を目指す

－ キダイ鱗由来コラーゲンの化粧品原料としての適性評価 － 」

(3)特許等取得
(4)学会活動等
①学会での役職 ・日本水産学会会員（昭和 63 年 4 月～現在に至る） ・日本生化学会会員（平成 4 年 4 月～現在に至る） ・日本比較生理生化学会会員（平成 4 年 4 月～現在に至る） ・日本食品科学工学会会員（平成 22 年 4 月～現在に至る）

５．地域・社会貢献活動

①国・地方公共団体等の委員会・審議会
1)「杉田玄白賞」審査委員会委員（2022 年 4 月～）
・第 1 回審査会（2024 年 6 月 14 日、オンライン会議）
・第 2 回審査会（2024 年 10 月 16 日、小浜市役所）：所用により欠席
・表彰式・記念講演会（2024 年 12 月 14 日、小浜市街の駅　旭座）：所用により欠席
2)全国農学系学部長会議会員（2022 年 4 月～）
・第150回全国農学系学部長会議（2024年6月6日～7日、学士会館［東京］、当番校：茨城大学農学部）
・第 151 回全国農学系学部長会議（2024 年 11 月 7 日～8 日、ホテルニュー長崎、当番校：長崎大学環境科学部）
3)全国水産・海洋系学部等協議会会員（2022 年 4 月～）
・第 23 回全国水産・海洋系学部等協議会（2024 年 6 月 5 日、東京海洋大学）
4)全国公立大学協会農学部会会員
・第47回全国公立大学協会農学部会（2024年9月30日、秋田県立大学、オンライン参加）
5)原子力発電小浜市環境安全対策協議会常任委員（2022 年 4 月～）
・第 90 回常任委員会および委員研修会（2024 年 12 月 10 日、働く婦人の家）
6）原子力発電若狭町環境安全対策協議会委員（2022 年 4 月～）
・原子力発電若狭町環境安全対策協議会（2024 年 9 月 19 日、若狭町中央公民館）欠席
7)福井県水産研究評価会議委員（2022年4月～）
・令和6年度水産試験研究評価会議（2024年8月28日、福井県水産会館4階研修室、本会議において座長を務めた）
8)ふくいの水産業のあり方検討会会長
・第１回「ふくいの水産業のあり方検討会」（2024年7月26日、福井県水産会館6階大ホール、本会議において座長を務めた）
・第２回「ふくいの水産業のあり方検討会」（2024年10月11日、福井県水産会館6階大ホール、本会議において座長を務めた）
・第３回「ふくいの水産業のあり方検討会」（2025年1月14日、福井県庁2階中会議室）
8）ふくい水産振興センター副センター長
・ふくい水産振興センター通常総会（2024年6月25日、福井県水産会館6階大ホール、当日は他の会議との重複のため欠席）
9)高大連携協議会委員
・令和6年度高大連携協議会（2024年6月10日、福井県立大学小浜キャンパス）
10)若狭地域産学官水産連絡会議幹事代表（2022年4月～）
・令和6年度若狭地域産学官水産連絡会議幹事会（2024年6月24日、福井県立大学かつみキャンパス）
・令和6年度若狭地域産学官水産連絡会議総会（2024年9月13日、福井県立大学かつみキャンパス）

11)福井県立若狭高等学校海洋探究会議委員（2024年4月～）
・第１回海洋探究会議（2024年6月11日開催、福井県立若狭高等学校　海洋キャンパス）
・第２回海洋探究会議（2024 年 11 月 12 日開催、福井県立若狭高等学校　海洋キャンパス）
・第３回海洋探究会議（2025 年 2 月 8 日開催予定、福井県立若狭高等学校　海洋キャンパス）

②国・地方公共団体等の調査受託等

③（公共性の強い）NPO-NGO 法人への参加

④（兼業規程で業務とみなされる範囲内での）企業等での活動
1）株式会社リナイス
・サケ皮膚からのタンパク質の回収方法に関する技術協力（2020 年 12 月より）
・アミノ酸分析に関する技術指導（2020 年 12 月より）
・ヒドロキシプロリンの比色定量に関する技術指導（2020 年 12 月より）
2）株式会社ホルス
・コラーゲンの分析に関する調査協力（2024 年 4 月より）

⑤大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等
1）県立大学小浜キャンパスを育てる会
・計画会議への参加（2024 年 5 月 9 日、福井県立大学小浜キャンパス）
・総会および講演会への参加（2024 年 6 月 17 日、福井県立大学小浜キャンパス）

⑥公開講座、オープンカレッジ、社会人・高校生向けの講座の開講
1)海洋生物資源学科、秋のオープンキャンパス(オンライン) 海洋生物資源学科の講義を体験してみよう！2024～ようこそアクアサイエンスの世界へ！～、「海洋生物資源の有効利用- コラーゲンを中心とするタンパク質資源の回収と利用ー」、2024 年 9 月 12 日

⑦その他

６．大学運営への参画

(1)補職

①海洋生物資源学部長（2022 年 4 月～）
【主な業務内容】
1）教育研究審議会、全学ミーティングおよび部局長会議への出席
2）学部・学科運営体制
　・学部・学科内の各種委員会、担当者の人員選定、構成を行った。
3)学部教授会の運営
　・定例学部教授会（年間11回）の議長を務めた。]
4）教育研究委員会への出席
5）入試本部会議への出席
5）学生支援委員会への出席（副委員長として）

②大学院生物資源学研究科　海洋生物資源学専攻主任（2023 年 4 月～）
【主な業務内容】
1)研究科教授会および学科長会議への参加
2)海洋生物資源学専攻のカリキュラム検討・改訂

(2)委員会・チーム活動
①全学委員会 ・教育研究審議会委員 ・学生支援委員会副委員長 ・大学院委員会委員 ・遺伝子組換え実験安全委員会施設管理者 ・教育研究委員会委員 ・入試本部委員 ・輸出管理委員会委員 ・福井県立大学学内競争資金審査委員 （5 月 25 日、26 日、29 日、30 日：学内研究費審査会） ・海洋生物資源学臨海研究センター運営会議 ②学部委員会等 1)学部将来計画委員会 2)学部予算委員会 3)高大連携委員会（委員長） 4)教員評価委員会（委員長） 5)海洋生物資源学臨海研究センター運営連絡会議 6)昇任推薦委員会（委員長） 7)非常勤講師審査委員会（委員長） 8)特任講師審査委員会（委員長） 9)学部カリキュラム WG ③海洋生物資源学科委員会等 1)学科将来計画委員会 2)JABEE 委員会委員 3)備品更新費配分担当 4)学科カリキュラム WG
(3)学内行事への参加
1）全学ミーティングへの参加 ・第１回（2024 年 4 月 24 日） ・第２回（2024 年 10 月 9 日） 2）オープンキャンパスへの参加 ・オンデマンド型（学部長として動画に参加） 3）第 32 回白樫祭参加（2024 年 10 月 5 日、開会あいさつ）
(4)その他、自発的活動など